巻頭エッセイ

Opening Essay

絵を描くことと対話

小田島 等　Odajima Hitoshi

絵はいつから「独りで描くもの」になったのか？ ということをよく考える。「絵」の歴史を振り返ると，宗教画は集団で作られていた。その頃は，「神的」なるものに，一度，どのような絵や像を創るべきかと申し立てをし，制作が執り行われていた。一つの法の下で絵が集団で描かれていた。このほかに集団で描かれるタイプの絵と言えば，ヒップホップ音楽になくてはならないグラフティと呼ばれる落書きがある。70 年代末，ニューヨークの黒人たちの，たゆまざる新しい遊びから誕生したものだ。重低音のビートに酔いしれ，スプレーで街の壁や地下鉄等に軽やかに描かれた。ほかに思い当たるのは，ピカソやモディリアーニらが住んでいたパリのアパート，洗濯船だ。皆で互いの絵を品評しながら，めったにお目にかかれない真摯な絵を描いていた。コクトーやアポリネール，マティスらも遊びに来る溜まり場。この頃はもう自分の絵は自らが仕上げているのだが，「お前がこうするなら俺はこのスタイルでいく」というような健全なライバル関係の中で，互いの作家性を鍛えあっていた。我が国における漫画のトキワ荘も近いものだったろう。トキワ荘の場合は，互いの原稿を手伝いながらの作業だったと伝え聞く。

僕はずいぶんと長い時間，独りで絵を描いてきた。デザインやイラストレーション，漫画等も数多く制作してきたのだけれど，たいがいが独りでの作業。コレが，とても「サミシイ」時間だった。と言っても，サミシク感じ出したのはここ最近のこと。それまでは独りで絵を描くことは当り前だと認識していたので，別段に孤独も感じなかった。そこへ，あるキッカケがあり「あれ？　独りで描いてきたのはなぜだろう？」と，通常化した習わしに違和感を感じるようになった。

そのキッカケとは，友人の画家，齋藤祐平が主宰する「間欠泉」というお絵かきイベントへの参加だった。教室などを借り，皆でお絵かき大会の体で行う自由なイベントだ。そこでの体験は僕にとって新鮮だった。会場には DJ がいて，ほどよい音量で音楽が鳴り，色々な描き手に出会い，話し，お互いの絵を交換しながら描いたりしていた。画家，イラストレーター，学生と参加者は様々。夕方になるとメンバーの誰かがご飯を作り，皆でそれを食し，完成した絵について講評会をする。

鶴の恩返し的な，密室に独りこもりシコシコと制作する「孤高の作業」によって生まれた絵が鑑賞者の胸を打ち，それが至高と語られるのはよくわかる。これは，ゴッホ・コンプレックス的な王道なのだが，それ以外にも道はあったのだ。この「間欠泉」に参加し，認識を新たにした。なぜこんなに簡単に楽しくなれることを思いつかなかったのか？　そう，皆でワイワイと絵を描いてもポンと傑作が出来てしまうものなのだ（った）。例えば，地球上の絵の原初と言われる，ラスコーの洞窟絵などはどうだったのだろうか？　独りの原人が苦行のように黙々と描いていたのか？　それとも家族や仲間で wii でもするかのようにワイワイと描いていたのか？　とても興味がある。僕は今，他者と対話をし，その息づかいを確認しあいながら一緒に絵を描きあうということに 1 つの可能性を感じている。

おだじま　ひとし

1972 年東京生まれ。桑沢デザイン研究所卒業。1990 年に「ザ・チョイス」入選。95 年より CD，広告物，書籍装丁のアートディレクションを多数手がける。同時に漫画家，イラストレーターとして活動。近年では展示活動も精力的に行う。2010 年には自身のアーカイブ的作品集『ANONYMOUS POP』を上梓した。http://odajimahitoshi.com/